



そして、「家族」の成員や「家族」の在り方は、「家族」が生活する「地域」の中にあり、「地域」の影響を受ける。このように、「わたし自身」の有り様や価値観は、「わたし自身」が独自に何の影響も受けずに築かれたのではなく、「わたし自身」を取り巻く多くの層によって影響を受けていることを表している。

どんなに学業優秀で本人が希望しても、女性が法曹資格を取ることも、選挙権も与えられていなかった時代には、「女性の言葉は聞く価値無し」とされていた。これは、女性自身の能力が男性に比べて低かったのではない。女性の能力が、意図的に社会の中で低くされ、それがあたかも真実・事実であるかのようにされてきた歴史的証左である。

特集 無意識の思い込み(アンコンシャス・バイアス)とは?

無意識の思い込みは、人間の脳のはたらきによるものなので、だれもが持っています。思い込みを持つこと自体は、自然なことです。しかし無意識の思い込みによって言ったことや、したこと、決めたことは、ときにだれかを傷つけたり、自分の可能性を狭めたりすることがあります。

たとえば、女の子が「消防士になりたい」と言ったとき…、男の子が「保育士になりたい」という夢をもったとき…、「女だから向いていない」、「男らしくない」などと人から言われたり、自分で思ったりして、夢をあきらめた人もいられるかもしれません。でも、「ふつう」って、なんでしょう。「女らしい」、「男らしい」とは、だれが決めたのでしょうか。それは自分の思い込みかもしれません。

(東京都子どもHP「無意識の思い込み(アンコンシャス・バイアス)」参照)

※アンコンシャス・バイアスとは日常の言動として現れる無意識の偏見のこと。特に性別に対する思い込みや偏見は「ジェンダー・バイアス」として、社会や個人の中に根強く残っています。

寄稿

おとぎ話をとおして ジェンダー・バイアスに気づこう

— NPO法人女性ネットSaya-Saya —

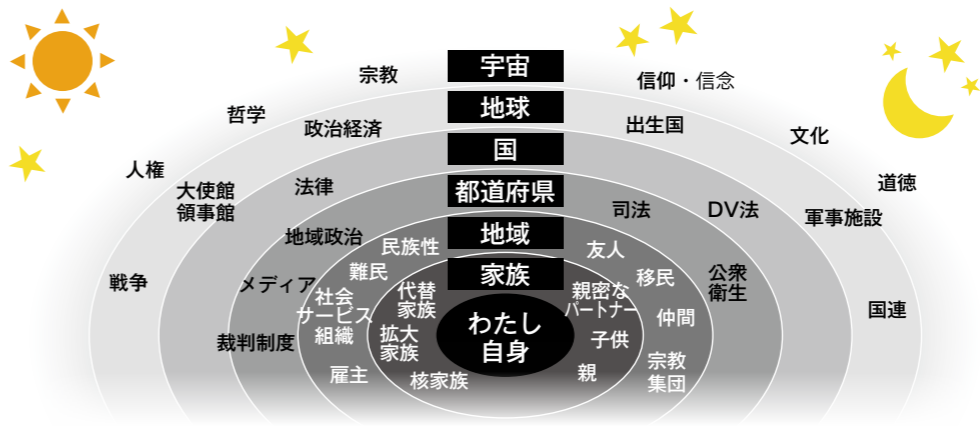
千野 洋見さん



「むかし、むかし、あるところにおじいさんとおばあさんが住んでいました」という決まり文句で始まるおとぎ話を、日本に幼い頃から住んでいる人は少なくとも一度は聞いたことがあるだろう。このようなおとぎ話は、日本だけでなく、海外にも多く存在している。「シンデレラ」や「白雪姫」などが代表格だろうか。これらのおとぎ話の多くは、勸善懲惡仕立てになっており、女性が主人公の場合は、苦難の末に王子様などの位の高い人に見初められてハッピーエンドとなるパターンが多いように思う。このようなおとぎ話に自らを重ね合わせ、「自分も大人になったら王子様に見初められたい」「自分も大人になったらお姫様と結婚したい」的な夢を抱いた人も少なくないだろう。長年に渡り、素敵

な物語として伝えられ、その話をしてくれた大人が「〇〇ちゃんもいつか、こうなるといいねえ」と言われ続けることで、私たちは知らず知らずのうちに、大人の価値観を内面化してしまっている。本稿のテーマである「ジェンダー・バイアス」とは、「性別役割についての偏見」と言い換えることができる。おとぎ話に代表されるように、私たちはジェンダー・バイアスのある社会に生きているため、その影響を否が応でも受けてしまっている。図1「私と地域、社会、宇宙までの関係図『銀河系(ギャラクシー)の図』」を見ていただきたい。この図では、「わたし自身」が中心にいる。しかし、「わたし自身」は、いわゆる「家族」と呼ばれる最も近い他者の存在の影響を強く受ける。

図1 私と地域、社会、宇宙までの関係図「銀河系(ギャラクシー)の図」



出典：NPO法人女性ネット Saya-Saya

「三つ子の魂百まで」という諺があるように、幼い頃に刷り込まれた価値観を変えるのは難しい。特にジェンダー・バイアスのように社会の隅々にまではびこり、異議を唱えようものなら、あらゆる方向から矢が飛んできて、血だらけになりながら訴え続けなければいけない状況の中ではさらに難しいだろう。ジェンダー・バイアスは誰の中にもある。私の中にもあるし、本稿を読んでいる「あなた」もまたジェンダー・バイアスから逃れられない。そこで私たち女性ネットSaya-Sayaは、抵抗感なく自らのジェンダー・バイアスに気づけるよう、「おとぎ話」をモチーフにしたワークを開発した。

ジェンダー・バイアスを変える3ステップ

ジェンダー・バイアスを変えるには、「認識する」、「体験する」、「仕組み化する」の3ステップがあると考えている。ステップ1の「認識する」は、まさに自分自身にジェンダー・バイアスがあるということとを認識するということである。これは意外に難しい。ジェンダー

白雪姫あらすじ

王様とお姫様の間にかわいい真っ白な肌をしたお姫様が誕生し、白雪姫と名づけられた。病気で亡くなったお姫様の後に来た新お姫様は、自分の美しさしか考えていない。魔法の鏡に「世界中であなたが一番美しい」と答えてもらっては喜んでいて、白雪姫が美しいお姫様に成長すると、魔法の鏡の答えは変わっていった。「自分よりも美しい者がいるなんて!」と怒ったお姫様は白雪姫を殺すように家来に言った。しかし家来は命令に背き、白雪姫をこっそり森の奥に逃がした。白雪姫はそこで7人の小人の家を見つけ、住まわせてもらうことになった。魔法の鏡によって、白雪姫がまだ生きていることを知ったお姫様は、毒リンゴを作ると、自らリンゴ売りのおばあさんに化けて白雪姫をだまし、毒リンゴを食べさせた。毒リンゴを食べた白雪姫は深い眠りについた。するとそこへ、嵐にあった王子様が迷い込んできた。王子様は白雪姫にやさしくキスをして、白雪姫を深い眠りから無事に目覚めさせた。そして、王子さまと白雪姫は結婚し、仲良く幸せに暮らした。

